仏典の翻訳について

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2013-08-01　西　宏

　この翻訳は他人に示すことを目的としたものではなかった。素人の仏教としては、岩波文庫などを読み流すのが普通のやり方だと思うが、それでは理解しがたい章句を掘り下げて探究することもなく、不十分な脚注・後注で我慢しなければならない。記憶に残ることも少ない。しかし、翻訳するとすれば、原文を理解しなければ移し替えることは出来ない。翻訳することは原文をしっかり理解することを意味する。この翻訳は何より自分の理解のためになされた作業である。それがなぜ他人の目に触れる形をとるか。これもまた、主語－動詞－目的語あるいは述語をはっきりさせなければ文にならないからであり、筋の通った仏典理解をしたいためである。学者ではないから、理解の程度も知れたものだが、故奇岳和尚の「それが自分の今の力量なのだから」という言葉にはげまされて、とにかくたどり着いた地点を形に留めることにした。

　もとより学問の方法も知らず、仏教の教育を受けたこともないので、独断は免れないが、原書（と言っても岩波文庫などだが）を読み込むことでは人後に落ちないと自負している。中国語やサンスクリットの知識も無いに等しい。本を読みながら脚注を読み、辞書を引きながら見当をつけるしかなかった。中国の人名・地名などは大部分中国・大同市のエスペランチストに手を貸してもらった。途中でこの人から「どうして道士の名前が必要なのか？」と質問されたが、彼の地では仏教が道教で解釈・表現された歴史が今も生きているようだ。実際、仏教は老荘思想や日本のアニミズムで理解しやすい範囲らしい。

　仏典を読み始めて、まず必要なことは、仏教を他の宗教から分離しなければならない、ということだった。現代日本ではイスラム教の影響こそ少ないようだが、キリスト教、道教、儒教からの知恵がふんだんにあり、どれがどの宗教の考え方かわからなくなっている。特に戦後教育を受けた世代は、意識して学ばなくても、知識はもとより思考までキリスト教化されている。仏教への入りにくさは、そのあたりにもあったと思う。また、浄土真宗と禅宗では別の宗教ではないかと思うほどその思想が違う。

次に見たのは、仏典は街で見かける仏教とはまったく違うということ。私は曹洞宗の檀家に生まれたせいか、道元禅師が好きだが、これは幸いだったと思う。ついでに言えば、他宗の悪口を言う人を私は仏教徒とは認めない。彼らには宗派的立場もあるだろうが他宗派の経典を読んだことがないらしい。知らないことに謙虚ではないからだ。たとえ司馬遼太郎であろうとも。

　仏典は現代語訳やエスペラント訳で読めば易しいだろうと思うのは間違いのようだ。その背後の基礎知識がなければ、表面だけの文意解釈しか得られない。解説なしには真意が読み取れることはない。漢文を書き下し文にすればある程度理解できるが、それで全部がわかるかと言えばそうはいかないのと同じだ。翻訳の限界を思う。

　術語の翻訳は、ほとんど参考になるものがなく、先人のエスペラント訳はキリスト教用語を転用している。それでは「仏教を理解してくれ」とキリスト教徒に媚びているとしか見えない。読む気がしなくなった。たとえば、天国と地獄は、仏教では浄土と奈落であって、似たようなものだが観念が違う。それを区別するには別の単語が必要だ。したがってPIVなどを読み漁って適用できる単語を拾い、また、新たにサンスクリット（むしろパーリ語）から造語した。PIV2には仏教用語のかなりの部分の記述を書き換え、新造語も入れておいた。私以外にも記述者がいるのだから、全体の責任を取ることはできないが、PIV1に比べれば、かなり正しい記述になったと思う。

　漢訳経典といえども、完全無欠の仏典ではないだろう。理解に苦しむところがいくつかある。それには私の考えでは及ばない分もある。しかし私でさえ指摘できるあいまいな記述があることも確かである。時にはわざとわからないように書いたのではないかと思うことさえある。たとえば、

「仏法僧」の「法」は普通には宇宙摂理のことであって、釈尊の下位概念ではないはず。ところがこの場合の「法」は「教え」の意味でしかない。この「法」の意味範囲は翻訳する時には２０あまりの訳語を用意しなければ処理できない。「行」も修行という意味だけでは解釈できない。

また、上座部経典には「仏国土を建設する」と言う言葉があり、同じところを漢訳では「仏土を荘厳する」となっている。どちらが正しいのかはわからない。これには別の本で渡辺照宏が荘厳と書いて「つくる」とルビをふっているの見つけて「仏国土を建設する」とした。「建設」と書いた本にはそのような伝説が付属していることが補強になった。

道元禅師に「無常迅速、生死事大」の語がある。前半は「時を惜しんで修行にはげめ」ということ。後半の「生死」は禅師に言われなくても大事に違いない。今さら口にすることか、という疑問が残った。これは後に、宇井伯寿の本に「輪廻は日常生活のことで仏教ではしばしば生死という」とあったので「日常こそ大事なのだ」という意味にとることにした。

書店で買える、僧職が書いた解説付きの仏典にも奇妙な解釈が見られることがある。

翻訳を手掛けているのは、普勧坐禅儀、辦道話、随聞記、宝慶記、般若心経、金剛般若経、仏遺教経、小経典類、四十二章経。父母恩重経は儒教思想。

今後は「永平公録」「正法眼蔵」「修証義」「観世音菩薩普門品偈」「楞伽経」などを訳することを考えないでもないが、困難も多々あり、悟りが知識とは無関係なことから、道元禅師は勉学より座禅を勧めているのを知ると、素人としてはここまでの勉強で充分では、とも思う。

宗教は科学的ではないから学ぶ必要はない、というのが現代の常識らしい。確かに実証性から言えば、宗教には統一性がない。必ずそうなるという保証もない。しかし、逆を言えば、科学は誰が試しても必ず同じ結果になるものだけしか扱わない。「あの世」は科学に適さないから扱わない。だが人間は科学的に証明されたものだけで生きているとは言えないだろう。そこに非合理な超心理学、宗教、占い、オカルトなどの存在理由が生まれる。これらが正しいかどうかは倫理によるしかない。

以上